

2001年モスクワ見聞録

---市場経済導入 10年目のロシア---

福安 佳子

まえがき

本記録は、日露青年交流センター若手研究者等フェローシップにより、2000年から2001年にかけて過ごした市場経済導入後10年目のモスクワでの実態について、ソ連時代、1984年から1985年のモスクワでの状況との比較の立場にたってペンをとり、現地で記録をしたものです。

一世紀の間に社会の激変を二度も体験したロシアという国の内実、それは多くの方々にとって大きな関心事であると思います。このいわばロシア社会形成過渡期の一時期の内面の変化の記録を、ウェブデータとして多くの方々にお読みいただけることは大きな喜びであります。ロシア理解の一助となればと願うものです。

福安佳子

2013年8月26日

目次

まえがき	1
1 路上の唾	4
2 街の変化の概観	5
車の数	5
ドル、ルーブル両替所	6
英語の普及	7
営業時間、労働時間	8
公衆トイレの整備	8
3 地下鉄の風景	9
4 物価と賃金	12
5 真の月収	17
6 新聞情報の量と質	19
7 10年の歩みとプーチン政権	20
8 徴兵制度	23
9 風刺文化	25
10 60年目の祖国愛	28
11 アイデンティティー	30
12 外国人用価格	32

13	中国の波、韓国の波	34
14	公園の風景とリサイクル	36
15	ロシア人の健康度	39
16	ナウカ (科学) の崩壊	41
17	ロシア人像	43



1 路上の唾

歩道のアスファルトを歩きながら真っ先に気づくことは、吐き捨てられた唾や痰が多いことである。公衆の面前で人々は平気で唾を吐く。16年前路上で唾を吐いていた酔っ払いの男を老婆が叱咤するのを見て、(当時の)日本では唾を吐く人なんてたくさんいるし、それをとがめる人なんていないのに...とソ連の公衆モラルに感心したものである。ところが今では定年を過ぎた老人の清掃婦が若者の吐いた唾や痰を箒で黙々と清掃しているのである。

これはまさにこの国の内面の変化を克明に反映する光景である。

このレポートは、16年前のソビエト時代との比較の視点に立って、市場経済導入後10年が経過したモスクワの現状、見たまま、聞いたまま、考えたままを現地において記録したものである。急速な変化にある過渡期の一時点の記録として、モスクワの現状理解のための一情報となれば幸いである。

2 街の変化の概観

車の数

まず第一に挙げられるのは車の数が激増していることである。ロシア製のボルガ、ジグリーをはじめ、日本製、ドイツ製、韓国製の車も多い。環状線では特に通勤時間はかなりのラッシュで、特に金曜の午後となると郊外の別荘（ダーチャ）へ向かう混雑とあいまって3～4時間の渋滞が続く。車の増加に伴って、モスクワ中心街の大気汚染も深刻になりつつある。中心街における、より差し迫った車の問題は駐車場である。駐車場を構えた大型店は郊外を中心にお目見えしているが、もともと

町のつくりには個人的な車の利用の考慮などないから、中心街においては歩道を含む路上が駐車場となっている。問題なのはその止め方



である。歩道半分に乗り上げる場合はまだいい方で、中には、歩道をしっかり占拠してしまっているものもある。車のない休日になると、歩道の



広さに驚くほどである。これらの取り締まりは今のところなく、駐車料金の必要な路上の駐車場もまだ少ない現状では、古いビルを取り壊して駐車場に変えるという発想が生まれるのは、もう少し先の話になるだろう。

ドル、ルーブル両替所

24時間営業のコンビニ的な食料品店が街のいたるところにできているが、大抵の場合その中に両替所もあり、ドルからルーブルに、ルーブルからドルに両替できる。駅の近くには、必ず複数の両替所があり、24時間営業のところが多く、また高額商品を扱う店も必ず両替所を構えているから、両替に不便を感じることはほとんどない。7月10日現在、ある両替所のレートは「ドル買い：29ルーブル、ドル売り：29ルーブル39カペイカ」。これも場所によって1ルーブル前後の差が存在する場合がある。必ず、対ドイツマルクレートと一緒に対ドルレートが両替所前に大きく表示されている。レートはカペイカ単位で毎日変化しており、ルーブルを売ってドルを買う場合の方が10から40カペイカ程度高い。これらのわずかなレートの差が、銀行の大きな財源となっているという話をきく。オフィシャルには、ドルでの取り引きは禁止されているが、ドルで価格が示

される場合が非常に多い。その方が確実に価値が把握できるからである。

英語の普及

レーニンと当時の書記長の肖像画、「世界に平和を！」など、プロパガンダ的な言葉のパネルが掲げられていたメインストリートの道路脇は、今やラテン文字の色とりどりの看板によってかわられた。シーメンス、サムスン、パナソニック、東芝などのメーカー名がビルの屋上に掲げられ、ネオンライト等にもラテン文字が氾濫する。テレビのコマーシャルでもコカコーラ、ネスカフェなどの英語はもはやお馴染みのものである。テレビで放映される映画もアメリカ映画を中心とした吹き替え版がほとんどであり、ラジオからも始終英語の歌が流れているが、街に見える文字も店の中で流れる曲も、英語のものがかかり多くなっている。

ただ、これはあくまで民間的な現象であって、行政的に、例えば地下鉄内の表示がラテン文字との併記に変わるところまでは、まだ相当時間が必要だろう。

営業時間、労働時間

ソビエト時代は店の営業時間は告知なしで変更され、昼の休憩時間は大概2時から3時、それも3時に行ってもしばらくまたされたうえで開けてもらえることも多かった。それが、前述の24時間営業はもちろんのこと、店の昼休憩の営業一時停止はほとんどなくなっている。朝10時から夜10時まで営業のスーパーも多い。これは昔のロシアを知るものにとっては驚くべきことである。

一日複数の仕事をかけもちしている人も多い。建設工事も、土日にかかわりなく、昼夜の別なく必要に応じて行われている。ソ連時代には建設工事といえはいつ終わるともしれず、長いものになると数年を要したが、現在では街並みは刻一刻と変化している。新しいマンション、ファーストフード店、食料品店などの工事が速いテンポで進められている。

公衆トイレの整備

公衆トイレは汚く、数も少なかったため、特に観光客にとっては悩みの種だったが、現在ではほとんどの公衆トイレが有料化されて、清掃も行き届いている。モスクワでは一律5ルーブ

ル（約 20 円）。ただし年金生活者、軍人、身体障害者、6 歳までの小児は無料になっている（これは公共交通機関の利用の場合も同様である）。

ソビエト時代は特に地方行きの大きな駅のトイレはジプシーの溜まり場になっていた。当時は刑法の厳しさから特に悪さをする事はなかったが、子供たちが手を出して寄ってくるのは現在と同じであった。そのジプシーも、モスクワの中心街から多くが追い出され、みかける数は減少した。公衆衛生の問題点は、ヨーロッパ方式の資本主義的方法によって、解決されつつある。



3 地下鉄の風景

殺風景だった地下鉄の入口から出口にかけて、さまざまな露店、キオスク等が並ぶ光景は、国鉄民営化によって様変わりした日本の駅の変化をはるかに上回るものである。以前から売ら

れていた新聞、雑誌はもちろんのこと、薬、本、洗剤、石鹸、花、洋服、下着、アクセサリ、小物、みやげ物、パン、飲み物など、ありとあらゆる品物が、地下鉄利用者をターゲットに待ち構える。ところが、これらの店の配置に全く秩序がないⁱ。美的感覚や景観など、全くおかまいなしに、自分たちの売りたいものを、自分たちの思うがままに置いている。女性用の下着は目につくように上部にかかげられ、地下鉄の出口の目立つところに、石鹸や歯磨きといっしょに生理用品がならべられている。昔の節度をわきまえたロシア映画が消えていったのと同様に、ここでは生活のすべてが露骨に売買されている。自家製の野菜や花を細々と売る老人、別の場所で安く買ってきた新聞を50カペイカ（約2円）上増しして売る若者や老人、それぞれたくましく、変化の波をきりぬけている。

戦争で足をなくした兵士、腰から下を全部失って手動の車の



台に乗りながら通行人を暗くながめている若者、乳飲み子をかかえたやせた母親、老人が、足早に通るすぎる乗客に、物乞

ⁱ 一年の間の変化はめざましく、店舗の改築、塗り替え、看板の設置などにより急速に秩序が形づくられつつある。

いの片手を差し伸べる。中には地下鉄の車両の中に直接乗りこんで「私は戦争で障害者になった。寄付をお願いします！」と、大声で乗客によびかけながら歩いてまわる松葉杖の元兵士もいる。市場で買って来た電池（単3）などを「店よりずっと安いよ（4つで10ルーブル）」と行商してまわる若者、車両の中のヴァイオリン演奏さえある。

地下鉄の車両、エスカレーターなどはソビエト時代につくられたものが何度も修理を重ねられながら昔のままに力強く動いているが、変わったところといえば、車両の中、エスカレーターの壁面に広告がかかげられていることである。以前は地下鉄全図と、ドアの「もたれるべからず」と窓の「老人、障害者用席」くらいしか文字がなかったのが、今は目をやっ



ってぼんやりとながめられる情報がある。

地下鉄の風景でもう一つ変わったことは、若者が老人に対して席をゆずる義務感を失ってしまっていることである。以前は当然のエチケットとして、機敏に反応していた若者が、無視をよそおい、老人の方から「座らせてくれないか」と声をかける

光景さえある。これはトロリーバスでも、路面電車でも同じようにみられる傾向である。

4 物価と賃金

現在ロシアの労働者の平均賃金は約1,700ルーブル（1ドル29ルーブル、約6,800円）といわれている。年金需給年齢は女性が55歳、男性が60歳で、働いた年数により、1,100ルーブルから1,500ルーブルと幅がある。年金はこの2月から顕著に引き上げられておりプーチン政権への批判をかわす市民にとってのプラスの政策となっているが、これは石油価格の値上がりによる利益が偶然なしえたわざであって、プーチンがことさらに行った福祉政策ではないとの厳しい見方もある。リュシコフ モスクワ市長の3割ほどの増補金も手伝ってようやく生活の最低限レベルに達している（例えば、66歳のI氏の場合、99年の12月で462ルーブル、2000年の5月には658ルーブルだった）。さて、これらの収入面に対し、支出全般を概観してみよう。まず住居費であるが、例えば3部屋の73.3平方メートルのアパート（既に私有化している）に二人で住むT

氏の場合、400～480 ルーブルの公共料金を払っている。その中で一番多いのは暖房費で4月分で240ルーブル、お湯の料金が95ルーブル、水が70ルーブルである。その他はゴミ運搬費12.4ルーブル、テレビアンテナ料金15ルーブル、維持費44ルーブル。日本に比べればわずかな額であるが、すでにこれで一人分の平均賃金の三分の一弱がけずられることになる（この8月からまた公共料金の値上げが予定されている）。食費の支出に関しては主な食品の値段を挙げてみてみよう。黒パン一斤半6～8ルーブル、牛乳1リットル12～18ルーブル、鶏肉1キロ90～110ルーブル、牛肉1キロ112～180ルーブル（ひき肉の場合は90～100ルーブル）、豚肉1キロ80～220ルーブル、冷凍さば（中）一匹60ルーブル、鮭1キロ300～480ルーブル、すずき1キロ約150ルーブル、ジャガイモ1キロ8～17ルーブル、玉ねぎ1キロ15ルーブル、キャベツ17ルーブル、トマト25ルーブル、キュウリ15～33ルーブル、リンゴ40～60ルーブル、オレンジ50～65ルーブル、さくらんぼ60ルーブル（それぞれ1キロ当たり、季節によってかなりの差がある）、水（2リットル）18～20ルーブル（5リットル29ルーブル、10リットル56ルーブル）ジュース1リットル25ルーブル、ビール（500ミリリットル）14～17ルーブル（輸

入物になると 22～99 ルーブルまでの値段も見られる)、ウォッカ 45～500 ルーブル、ワインは 0.75 リットルモスクワ製で 43 ルーブルから伝統的なグルジアワインで 200～300 ルーブル代、輸入ものになると 500 ルーブル代まで並べられている (ちなみに「日本盛 (0.72 リットル)」で 508 ルーブルの値段がついている)。これらは買う場所によって価格にかなりの差がある。概して市場では安価である。1 日一人 50 ルーブルで暮すとしたら一月 1,500 ルーブルはかかることになる。一般市民がいかに食費の節約を余儀なくされているかが窺える。例えば、いつも水を買って生活できる人は限られている。モスクワの水はかなり質が悪く、黒い鉄粉が必ず沈殿して味も悪く、そのまま飲むことはできないが、実際は沸かすだけで使っている人がかなり多い。健康に配慮できる人はドイツ製のフィルターで濾して飲んでいる。これがかなり精巧なもので、味までも改善するすぐれものである。1 日一人分 2～3 リットルの水を毎日買えるのは、現在のところ外国人か、かなり裕福なニュールースキー (新ロシア人) くらいなものである。

さて、衣服、雑貨、電気製品に関しては日本とさほど変わらない価格であると言ってよい。例えば、女性用セーター 300～500 ルーブル、男性用ワイシャツ 300～400 ルーブル、靴 1,350

～2,500 ルーブルなど。これらの価格は市場とデパートとではかなりの差がある。市場では値段を交渉でき、小売店やデパートの3分の2から半値で手に入れることができる（モスクワには、大きな衣服市場が二つある：カニコーヴォ、スボルチーヴナヤ）。電気製品で異なることは、保証がほとんどの場合1年であること、買う際に、必ず店員が動くかどうか、客の前で確かめることである。それだけ商品の品質が確かではないことを物語っている。「同じ日本のメーカー名がついていても、中身が全くちがうんだよ」と修理工のアリョーシャは語る。

その他交通費に関しては、地下鉄5ルーブル、トロリーバス、路面電車いずれも4ルーブルである。これらは距離に関係なく一律である。ソビエト時代は1ルーブル360円のレートで、地下鉄が5カペイカ、トロリーバスが4カペイカ（1カペイカは1ルーブルの100分の1）、路面電車（トランバイ）が3カペイカだった。牛乳1リットルが34カペイカ、白パンのバトン一本が12カペイカ、牛肉1キロが2ルーブル50カペイカ、ペレストロイカまで価格は変わることはなかった。それが店



では複数の選択肢があらわれ、どの品物も品質に関しての信憑性がなくなった。

「もし、20年前の私がこんな何でもあって選択の困るような店の中に立たされたとしたら、きっと気が狂ってしまったと思うわ。」と、62歳のスヴェトラナ。選択肢がない時代の方がずっと気楽だったと振り返る。「でも、選択どころか、買おうにも店にも何もなかった時代があったのよ。私たちは何だって自分でつくったわ。洋服だって、食べ物だってなんだって。だから今でもその習慣からなかなか抜けられないのよ。」と、あり合わせの布を縫い合わせて作った鍋つかみを見せてくれる。「洋服も身にあったものを着ようと思ったら自分で縫うのが一番だったわ。ロシアの女性はたとえ食べなくたっておしゃれをしようと心がけるの。今でも自分で縫う人はたくさんいるわ。」

まわりの状況をものともせず、町の中をさっそうとおしゃれをして歩く女性たちの秘密はこんなところにあるのである。

5 真の月収

上記の物価の中で1日一人分の食事に最低限50ルーブルはかかるとなると、アパートの公共料金の500ルーブルを支払って、月1,700ルーブルの給料で家族を抱えて生活するのは不可能なことに思える。食費は日本の5分の1としても、衣料品の値段はほとんど日本と同じといってよい。そのような中で、どうやって人々が着飾り、最新のスーパーでカートいっぱい買い物ができるのか(週に1度のサイクルとしても)不思議であった。

ようやくその謎がとける。平均月収というのは、まさに書面のことなのである。しかもこの数字はまさに平均であってモスクワの場合は実質はかなり高いという。たくさんの個人企業ができつつある今、税金対策が企業にとっても従業員にとっても生き残り対策なのである。例えば、中小企業に勤めるナターシャは130ドルの給料をもらっているが、書面に記すのは50ドル、これで企業にとっても彼女自身にとっても安泰である。所得税は以前は収入の35パーセントであったが現在は個人所得税は13パーセントに下がった。「私たちにとっては死活問題だけど、お上にとってはほどおってことない金額よ。所得隠し

なんて、当たり前のことよ。」とナターシャ。イーラも「もちろん税金は年金にだって使われてるけど、戦争にだって使われているの。そんなことのためにあたしたちが犠牲になることは全くないわ。」と声を振るわせる。もちろん、職業によって、給料をもらう時点できちんと税金が引かれている場合もある。外国との合弁企業の場合はその傾向が強いようである。面白いことには、政府はテレビの広告を借りて、人々に所得隠しをしないように呼びかけている。二つのリンゴを並べて、「以前は35パーセントをとっていました（リンゴが35パーセント分切り取られる）。今はたったの15パーセントです（リンゴが15パーセント切り取られる）。ヨーロッパで一番低い所得税！」所得税額が下げられたことを、広く映像で知らしめているのである。また、顔部分を隠され連行される男性たちの映像とともに、「隠して捕まるより、さあ、もう払う時ですよ。」というちよつとこわい声の流れる広告もある。これらを見るだけでもどれだけ所得隠しが蔓延しているか理解ができる。

6 新聞情報の量と質

街のいたるところで新聞、雑誌は売られているが、現在では日刊紙が10紙(2.5ルーブル～5ルーブル)、週刊紙7紙(3ルーブルから6.5ルーブル)程もあり、どの新聞を読めばよいのか迷うほどであるが、複数の新聞の小売店からの情報によると、一番よく売れているのが、「MK」と称される「モスコーフクキー コムソモーレッツ (モスクワ共産青年同盟員)」。市民の多くにとって興味のある話題をちょっと毒舌的な表現力で語る新聞である。しばらく前までは、「独立新聞」が圧倒的な読者を獲得していた。文字通り、どこにも属することなく、真実を伝える傾向の強い新聞だったからである。しかし、この6月、政権の圧力で、社長の入れ替えがあった後は、鋭敏さを欠く新聞になりさがった。その他よく読まれているのが、「コメルサント (実業家)」という経済情報紙である。毎日新聞を売っているトーリャは、特定な愛読紙はもたない。「どの新聞も、その所有者の立場を代弁するものだから、ひとつ読んだって真実なんかわかりっこない。ゼーんぶ読んでみて、ところどころをつなぎ合わせてようやく真実がわかるんだよ。だから普通新聞は読まないんだ。」これでは全くソビエト時代と変わらない。

党の機関紙「プラウダ（真実）」と、行政執行機関紙の「イズベスチア（報知）」が幅をきかせていた時代と本質的に変わりはないのである。何処でどのような事件が起こり、何処でどのような催しがあるか、自分にはどれだけの権利があるか、それらに関する情報は求めれば得られるようになった。しかし、国家上層部の動きは依然として市民にとっては不可解なままである。

7 10年の歩みとプーチン政権ⁱⁱ

1998年8月、プーチンが政治の舞台に登場するまでの市場経済化の推移をざっと追ってみよう。91年6月、エリツィンがロシア共和国大統領就任、8月のクーデターを経て、12月、ソ連邦消滅、独立国家共同体（C I S）が誕生する。92年4月にIMF、世界銀行に加盟、事実上資本主義国の仲間入りを果たす。10月に民営化小切手（バウチャー）を発行して大衆の民営化をはかるがインフレ、国際競

ii・溝端佐登史氏（京都大学 経済研究所）によるロシア語通訳協会関西支部講演「ロシアの市場経済化の現状とプーチンの経済戦略」（2000年12月9日）の録音テープ、資料に基づく。

争率の低下を招き 12 月には議会と政府との対立が表面化、93 年には急進改革派が過半数を割り、共産党、農業党、自民党が台頭する。94 年 8 月、インフレ再燃、10 月、為替レート~~の急落~~、12 月、チェチェン共和国への武力介入がはじまる。95 年 8 月、国債発行による大規模民営化（事実上大企業への払い下げ）開始、96 年 2 月、国債発行を外資に拡張。7 月、大統領選挙でエリツィン勝利、12 月、IMF8 条国へ移行。97 年 11 月、日露首脳会談（クラスノヤルスク）。98 年 1 月 1 日、デノミネーション実施（新 1 ルーブル=旧 1,000 ルーブル）、3 月、チェルノムイルジン内閣更迭、4 月、キリエンコ首相就任。7 月、危機脱出プログラム採択（IMF、世界銀行が 98~99 年にかけての 226 億ドルの緊急融資を承認）。8 月 17 日、ロシア金融危機（高利の短期国債依存と、低い外貨準備高に起因）。対ドル目標相場圏を 1 ドル=6.0~9.5 ルーブルに変更。民間対外債務の返済を 90 日間凍結。18 日、中央銀行が 90 日間の凍結措置声明。23 日、キリエンコ首相、全閣僚の解任、首相代行にチェルノムイルジン。9 月 2 日、ルーブルの対ドル目標相場圏を放棄、急激なルーブル下落がはじまる。11 日、プリマコフ外相が首相に指名される。11 月 15 日、緊急経済対策策定

(金融再生委員会、開発銀行の設置)、12月、外貨の強制売却比率の引き上げ。1999年5月、プリマコフ首相解任、ステパーシン首相就任。8月、ステパーシン首相解任、プーチン首相就任。モスクワで爆弾テロが起こる。9月、第2次チェチェン戦争開始。12月、プーチン大統領代行、2000年5月、プーチン大統領就任。

この流れからもわかるように、事実上、95年から本格的に動き出した資本主義経済と、98年の危機後の低迷を経て、石油価格の上昇と、ルーブル切り下げの効果が発揮された時期に、国家の治安の必要性の設定のもとに生まれたのがプーチン政権である。彼は「強い国家の上に立つ自由主義」という一見矛盾した目標をもっている。2000年7月8日の大統領教書によると、「長期的な経済危機の主要因になっていたのは非効率的な国家であり、安定した経済成長のためには独立した裁判と遵法機関による国家の強化が必要である」としている。現在、「土地法」「労働法」「刑法」など、様々な法の見直しが進行中である。

8 徴兵制度

時代が変わってもソビエト時代からの徴兵制度は依然として存続している。

18歳に達した男子は2年間の兵役が義務付けられている。しかしながら国立系の高等教育機関において学業についている場合、片親しかおらず、その親が年金生活者の場合、結婚していて幼い子供がいる場合、身体的な障害がある場合は徴兵義務を免れることができる。チェチェン戦争が今だ続いている現在、このいずれの例外にも属していない息子をもつ若い両親、特に母親にとってこの国は今だ恐怖の国のままである。「何でも言いたいことが言えるようになったことと、外国に出られるようになったこと、これだけが私たちに与えられたものよ。あとは何も変わりはない。」彼女にとってプーチンの出現は恐怖以外のなにものでもなかったという。「どんどん昔にもどっていつている。」チェチェン戦争にしても、ソビエト国歌の復活にしても、言論の統制に



しても。戦争がいかなるものかを知っている年金生活者のT氏にとっても、プーチンは理想的な大統領とはいえない。「チェチェン人を“肥溜めで打ち殺す”なんていう言葉を使える人間がどうして大統領でいられるのかわからない。彼らにも石油にも固執することは全くないのに」。一方今のあふれる物文化にひたっている若者にとってはプーチンは信頼できる大統領である。若者の支持者は多い。

その青年たちの両親はどうしたら息子を徴兵に出さずにすむか試案を重ねている。外国に留学させるか、あるいはコネを使って偽造診断書を書いてもらうか。ソビエト時代は“医者患者を治すためのものでなく、休日をとるための診断書を書くためのもの”という話は周知のことであった。もちろん“その多くは”という限定詞を伴ったことである。なんとその風習とも言える性質が現在も顕著に残存しているのである。偽造診断書を書いてもらうのに、3,000ドルから5,000ドルを支払うという。そのプロセスはとても簡単なものではない。まず、コネで頼める医者を見つけ、実際にしばらく入院し、診断書をもった後もその病状の継続が審査条件を満たすまでお金で解決しなければならないのである。いくら括弧付きとはいえ「平均月収」が約60ドルという状況の中、親にとってこれはたい

へんな試練である。それでもチェチェンで殺されるよりはと、親の愛情は画策を練りつづける。

9 風刺文化

ソビエト時代には、アネクドートと呼ばれる小話によって政治や社会が風刺され、現実社会の憂さがはらされていた。あからさまには批判できない社会の実態を、巧みなもじりで言うのは、笑って気分を晴らすというものだ。例えば、女性の間ではやった日常生活に根付いた次のようなもの。

(トイレットペーパーがなかった頃の小話)

トイレットペーパーを複数持って帰ってきている近所の主婦に

「いったい何処で手に入れたの？」

「クリーニング屋できれいにしてもらってきたのよ！」

など。

ゴルバチョフのグラスノスチ（情報公開）から始まり言論の自由が完全に市民のものになった時、アネクドート文化はす

たれていった。「ソビエト時代のものに比べたら、今のは、地を這うレベルだよ。」と、薄い「ロシアのアネクドート集」を見せてくれながらキオスクのヴァロージャはつぶやく。

「言論の自由」という権利を得た当初、人々は堰が切れたように思ったことを吐き出しはじめた。上司であろうが、政府であろうが、大統領であろうが、おかまいなしに批判の対象となった。しかしながら、現在、その流れは再び堰き止められつつある。しばらく前までは言論の自由のあおりをうけて、一部の報道機関も、市民並みにプーチン政権に対する批判をあからさまにおこなっていた。チェチェン紛争や、原子力潜水艦クルスクの沈没事故など、その材料は豊富にあった。しかし、この4月14日、政府に対していちばん批判的だった民間テレビ局NTVを、プーチン政権が掌握してからは、その流れに変化がおきた。政府は、ORT, RTR, NTV という3大テレビ局（現在全部で14のテレビ局が存在している）を事実上傘下に置き、言論の統制をはかる動きを展開している。

しかしながら、NTVを追われた社長をはじめ、ポリシーをもつキャスターたちが、そのまま黙って引き下がるわけがない。彼らは今、政商であるベレゾフスキー氏の経営するTV6に移り、相変わらず鋭い現実直視の眼をもって番組を作りつづけて

いる。その彼らの番組に「明かりを消して」という午後 9 時 40 分から始まる政治批判の人形劇がある（月曜から木曜まで）。NTV から移籍したスヴェトラナ・ソローキナの歯切れのよい 9 時からのニュースを受けて、その日の疑問や問題点をウサギとブタの人形が台所のテーブルで話し合うというものだ。時々そこには人間のゲストも登場する。なぜ台所かというと、ロシア人にとって、そこは気の置けない者同士が、お茶を飲みながら気の置けない話ができるいちばんリラックスできる場所だからである。彼らはその日理解できなかった出来事を、街の動きを伝えるイヌの特派員とロシアホテル（クレムリンに一番近いホテル）に宿泊して政府上層部の動きを報告する、狸ともクマとも見分けがつかぬその都度名前も変わる解説委員に尋ねるというスタイルをとっている。この 15 分の番組は、その日ごとのテーマを「チャストゥーシカ」と呼ばれる四行詩（アネクドートの原型）にして、毎回同じメロディーをつけて皆で歌い、終わられることになっている。

伝統的な風刺文化が、このようなかたちで生きつづけていることは面白い。ブタもウサギもイヌも、何を言っても解雇されることはない。

10 60年目の祖国愛

6月22日は大祖国戦争開戦記念日である。1941年6月22日 午前4時 突然のドイツの攻撃により、戦闘は始まった。60年目にあたる今年は各地で大々的に戦没者慰霊のための催しが行われた。集会、コンサート、戦争映画の放映、黙祷、大統領の追悼のことばなどであるが、中でも強い印象を与えられたのは、「忘れられた連隊」と名づけられた民放(TV6)の番組である。この番組のシリーズは戦争で行方不明になったままの人たちの身元調査など、適宜戦争に関わるイベントに沿って組まれている番組であるが、この日は次のような設定であった：

その日は11年生にとって卒業ダンスパーティーの日だった。準備されたレコードはかけられることはなかった。急に始まった戦闘に、平和に過ごしていた若者がどのように運命を翻弄されながら巻き込まれていったかを、戦争の証言、映像を交えながら描いていく。ダンスパーティーが行われるはずだった広場に60年後の同級生たちが座っている。戦争の地獄をくぐり抜け、生き残った人々だ。その傍らには、戦争をテレビや映画だけでしか知らない、現在の

11年生の一団が座る。60年前の11年生が、涙ながらに
いかに親、兄弟が傍らで殺されていったか、どんなにひも
じい思いで、さみしく恐ろしい冬を過ごしたかを語る。そ
れを現在の11年生が聴き、その話についての感想を語る
というものだ。番組の最後に、60年前のその日、とうと
う鳴り響くことのなかったレコードの曲がかけられる。一
組の年老いた若者が踊り出す。と、自然に誘い合い、手を
とりあってダンスの輪が広がっていく...

イデオロギーの大きな傘を取り去った国が、国家のために犠
牲になった2000万人に対して、国民をあげて心から追悼をさ
さげる。そこには、歴史に対して、死者に対しての、衷心から
の遺憾の気持ちが込められている。わが国の場合はこんな日
あるだろうかと考える。ものごころついた子供から、老人
まで、いっせいに歴史をふりかえり、死者に対する追悼と感謝
を捧げる日はない。残念ながら8月6日、9日も、8月15日
も、国民の一部だけが記念行事を行なう日となってしまった。
広島を語っても、靖国神社を語っても、イデオロギーと宗教の
色眼鏡でとらえられ、その眼鏡をおそれながら行動を制限され
ている。それは日本人の歴史認識の甘さに起因するものではな

いだろうか。悪に対し、死に対し、真っ向から直視しようとする体質、はためを気にして真に必要なことは何なのかを見失ってしまっている。そもそもイデオロギーとは何か。その恐ろしさともろさをこの国の歴史が明確に語っているではないか。現代の文明社会の基礎の中に、自らの愛も欲望も捨て去って犠牲になった人たちに対する思い、戦争の悲惨な歴史に対する思いは、誰とても同じく、純粋なものではないだろうか。歴史の生き証人との対話、世代への体験の受け渡しを通じて、若者、子供たちに自国の歴史を生々しく伝えていく、これが今、一番大切なことではないかと考えさせられた日だった。

11 アイデンティティー

ソビエトが崩壊して職を失った中年の稼ぎ手は非常に多いⁱⁱⁱ。隣に住むウラジーミルも、以前は顎鬚をはやして大学で生理学の教鞭をとっていた。「前は教授だったが、今は誰もいないんだよ。」今は化粧品関係の企業で働いている。同じく教職を失

ⁱⁱⁱ ・ 巨大な国営企業の庇護の元に必要人員の2倍以上の雇用者が温存していた状況から一変して大規模なリストラが行われた結果による。

い、出版社等複数のところでアルバイトをしながら生計を立てているナージャは「自分のアイデンティティーを失うことほど人間にとって悲しいことはないわ。自分は誰ですって職業が言えなくなることがどんなに辛いことかわかる？」と問いかける。

アイデンティティーを失ってしまったのは彼らだけでなく、今まさにロシア全体がそうであると言ってよい。町には外国製品があふれ、テレビではどのチャンネルでもアメリカやフランスの映画を吹き替えで流している。それも、殺人事件がらみのサスペンスものやSF映画が多い。コマーシャルはネスカフェ、コカコーラ、マクドナルド、ニベア、サンヨー、日清など、外国製品を中心に展開されている。独立採算制の放送局がほとんどであるため、外国資本に頼って資金稼ぎをせざるをえない状況なのである。

とはいえ、最近はロシア製の製品の宣伝もないわけではない。伝統的なロシアのクッキー、アイスクリームの宣伝、ロシア製ビールなどの宣伝などを見るのは、この国の将来を懸念するものにとっては心地よいことで



ある。マクドナルドのハンバーガーよりも、自分の国のピロシキの方がより健康的で美味しく、コーラよりライ麦と麦芽でつくられた伝統的なクワスの方が、何倍も美味であることに早く気づいてほしい。残念ながら、マクドナルドもコーラも、圧倒的なコマーシャルの力をかりて若者の食文化の中に着実に侵入しつつある。世界的に有名なマクドナルドの「今なら…」は、ここではアイスクリームを中心に“6ルーブル(24円)”を銘打っている。子供時代の味覚を奪い取ってロングランをはかろうという息の長いアメリカ企業の戦略は、ロシアにおいても成功しつつあると言ってよい。郊外には合弁企業の工場が広い敷地を占めてどっしりと立ち並ぶ。6月21日には下院の第一読会において市街地の土地売買を一般市民、外国人に認める法案が通過した。これについても賛否両論があるが、今後ロシアがアイデンティティーを失っていく路線に乗りつつあるのは確実なようである。

12 外国人用価格

外国人からはいくらお金を巻き上げてかまわないという

観念が、この国のいわば二重経済体制をかたちづくっている。まず、一番わかりやすいのがホテルの値段。外国人用には一泊50ドルから300ドルまでが紹介されるが、通常のサービスが受けられるホテルは500ルーブル（20ドル）前後から存在する。美術館の料金もロシア人が10ルーブルで済むところが外国人旅行者は120ルーブル、という具合である。医療費に関しては驚くべきである。例えばロシア人が胃にからまった腸の手術をして2週間ばかりの入院をした場合、300ドルで済んでいるにもかかわらず、外国人が3日程通いで行ったX線、CT検査等に対して、12,000ドルもの請求をするというものだ。もちろん、保険に加入していることを考慮してのことであるが、取れるものからは際限なくとるという精神で、基準というものが定まっていない。

住居費に関してもそうである。例えばアパートを貸す場合、所得隠しの一環で大家は文書の契約を交わさずに済ますように努めているが、外国人に貸す場合、400ドルから550ドルが2部屋のアパート（リビング、寝室、台所、浴室）の平均的な相場である。しかしながら企業人や外交官などは警備付きの2,000ドルから4,500ドルの高級アパートに住むのがなぜか通常となっている。「安全地帯」はそこがロシアであることを忘

れさせるほど廻りの状況と異なっている。彼らはロシアに居ながらロシアの実情を把握できない位置で生活している。地下鉄に乗ったことのない外交官、トロリーバスの料金(4ルーブル)を知らない新聞記者がいることは皮肉なことである。外国人の過剰な警戒心とおごりの態度が外国人用価格を不当に温存させる結果を招いていることを理解すべきである。

ここではロシア人の間でも外国人の間でも貧富の差が顕著に現れている。

13 中国の波、韓国の波

環状線の北に位置するノヴォスラボツカヤの地下鉄の駅を出てすぐのところに、最新式の大きなビルが立ちはだかる。昨年11月に中国資本の建てたビルである。一階の一角にはカフェ、そのほぼ全体が大きなショッピングビルになっており、スーパーマーケットをはじめ、衣料品、インテリア、お化粧品、薬など、かなり西側に近い値段の高価な品が美しく並べられている。中国の陶磁器はもちろん、絨毯、雑貨なども扱われており、中国茶の喫茶店もあって、買い物で疲れた足を休ませられ

るようになっている。中国人の従業員も多い。小規模なものでは、駅の近くなど、路上に中国風の屋根をかたどった簡易な露店で「中華料理」ファーストフード店もお目見えしている。一皿の値段は50ルーブル程度。また防寒具など、衣服、繊維関係は、大半が中国製品であるといつてよい。驚くことは中国製の電気製品が意外と多いことである。比較的安価で、性能も安定している。

韓国企業の進出でまず目立つのは韓国食の惣菜屋である。きくらげや湯葉やワカメ、キュウリのサラダなど、にんにくをたっぷり効かせた健康惣菜が今やどこのスーパーでもデパートでもウインドウに並べられている。仕事帰りの主婦や一人暮らしの男性などには人気のコーナーである。日本食も「すし」を中心に知られ、健康食的なイメージで受け止められているが、まだレストランの域内にあつて家庭まではなかなか入り込めない状況にあるのに比べて、今や韓国の家庭料理はロシア人の食生活の中に巧みに入りこんでいる。また、電気製品、自動車産業においても韓国の進出は顕著である。韓国製の新車を15,000ドルで買ったビジネスマンのA氏も日本製のものよりも安くて大きさも手頃、性能にも満足している。北方領土問題でぎくしゃくしている日本を相手にしなくても、韓国、中国の技術、

資本でいまのところ充分間に合っているという様子である。現地から見ると、日本はどんどんと取り残されている感がある。在モスクワ日本大手企業の規模縮小、撤退も98年の金融危機以来続いている。

車の部品を扱う会社に勤める韓国人のM氏は「ロシア人は今は品質に対してあまり注意を払っていないから我々の製品で満足しているけれど、5年後には品質がよく、長持ちする方が長期的に見て特だとわかって日本製品に目を向けるようになるだろう。」と話す。半分本音、半分お世辞の入ったコメントだろう。韓国製品の品質の向上もめざましい。

14 公園の風景とリサイクル

アパートの建物に囲まれた空き地は例外なく遊具、ベンチを備えた公園になっている。人々は夕方の一日の緊張のとれた時間に公園に集い、思い思いの安らぎの時間を過ごす。5月頃から7月末頃までは9時、10時まで明るいからかなりの余裕をもってこの時間が楽しめる。6時から7時はそのピークで大きな公園になると子供たちはサッカーを楽しみ、仕事帰りの中年

男性はタバコをくゆらせ、中年のおばさん組みはビールの中ビン
をラッパのみしながら話しに花をさかせる。日本では公園は
子供連れの母親と老人のもののようにになっているが、ここでは、
十代半ばから十代後半の若者たち、二十歳を過ぎたカップルな
ど、さまざまな年齢層の公共の場になっているのは微笑ましい
ことである。この国の未来は暗くないことをしかと感じさせら
れる光景である。 夕方でも 20～25 度ある夏の宵、人々はそ
れぞれ飲み物を片手に話しに花をさかせるが、気がつくことは、
そのほとんどが瓶であることである。ビールにしてもジュース
の大瓶にしても重い瓶を持ち歩くことに彼らにそう抵抗はない。
今でこそ水はすべてペットボトル、ジュースや乳製品のほ

とんどが紙の容
器になっている
が、ビールは瓶
が主流であり、
したがって公園
までちゃんと栓
抜きを持参して



栓を開けて飲んで
いる。ソビエト時代はジュースも、乳製品も、
ジャムも、漬物も、ガス入りのミネラルウォーターもすべて瓶

だった。それをリサイクルして、つまり自分できれいに洗って回収場所に持って行き、3カペイカから10カペイカを返してもらっていた。一月分の奨学金が150ルーブル（ロシア人の場合は40～90ルーブル）、1ルーブル360円の時代である（1カペイカは1ルーブルの100分の1）。当時は牛乳1リットルが36カペイカ、長い白パン（バトン）が12カペイカ、牛肉1キロが20ルーブルだった。この時代の10カペイカはかなりの価値をもっていた。当時はゴミはほとんど出ず、リサイクル化がかなり進んでいたものである。このリサイクル文化ももうこの国にはなくなってきつつある。500ミリリットル入りのビール瓶だけはそれでも地区に2～3箇所になってしまった回収所、または定期的にまわる回収車によって、回収されているが、1ルーブル（4円）から1ルーブル20カペイカ（4.8円）にしかならないから多くの人が、特に若者は、そのままゴミ箱に捨てている。この国では瓶も缶も紙も生ゴミも、分別することなくすべて一つのゴミ箱に入れられるのである。時々、そのゴミ箱をたんねんにひっくり返している老人に出会う。瓶をわずかなお金に換えるためである。しかし若者は一度も瓶を売ったことのないものがほとんどである。彼らにはビール瓶一瓶でどれだけ戻ってくるかなど、全く関心がない。もう少ししたらアル

ミ缶の文化が浸透してくるだろう。伝統的な瓶入りビールの文化から切り離すため外資系のビール会社はアルミ製のビール缶の構造を一枚一枚説明しながら軽さと便利さ、保存性の確かさをテレビで宣伝している。アルミ缶の半分つぶされたものが、公園に転がるような光景はできて欲しくはないと思う。

15 ロシア人の健康度

ワールドヘルスリポートの統計（2000年）によればロシア人の平均寿命は男性が62.7歳、女性が74.0歳である。なぜ男性の寿命が低いのか、第一にあげられることはストレスだろう。第二に飲酒。ロシア人の飲酒の習慣は今にはじまったことではないから、90年代からの生活の変化による精神的な打撃に飲酒があいまって寿命を縮める結果になると考えられる。特に40代後半から50代にかけての年齢で、保護された国家機関の充分な役職についていた人たちにとって、ソビエト崩壊は打撃以外のなにものでもなかった。原子力関係のエンジニアだったサーシャも今では雑貨の小売業を営んでいる。生活の変化は天と地の差だと、昔もっていた特権を語る。それでも仕事にあり

ついた人は幸せなほうなのである。

「今のロシアでは、病気にもなれない」とサーシャ。無料の病院が現在も存在し、有料の病院と共存するが、無料の病院の質は推して知るべしである。所得に応じて、お金のない人は払わなくてもよいという理想的なシステムの現状は、「無料の病院に行くなら、行かない方がましだ」という言葉に反映されている。無料の病院は、ソビエト時代の形だけの残存物にすぎない。市販の薬も、表示とは違う内容物が含まれていることが多く、特に安い薬には注意が必要である。「薬はひととこ治して、ひととこだめにする。だからあまり飲まないようにしている」と語るマリアは、もっぱら持病の治癒をロシア正教の神にゆだねている。



16 ナウカ（科学）の崩壊

生理学の教授が化粧品会社の平社員になり、先端技術のエンジニアが行商をおこなうという社会の変化は国家の保護を受けて長い年月の間に培われてきた学術機構が礎を失ってズタズタに崩れ落ちた結果である。これは、かつて世界の頂点のレベルだった舞台芸術や、ロシア映画がその質を落としていったことと同じ道筋で理解できる。芸術家は世界各国に散り、生き残りをかけた劇場、映画会社は外国の資本に頼って活路を見出したが、予算を削減された国立大学の場合はその資金繰りに長く頭をなやまされざるをえなかった。トイレの状況をみれば、その学部施設への予算配分がいかなるものか想像がつくものである。もともと給料が低い教育関係者に未払いのダブルパンチが襲いかかる。彼らはアルバイトを余儀なくされるから授業準備は手薄になる。教育のレベルがどんどん落ち、大学側は裕福な学生を成績にかかわりなく取るようになる。よほどよくできるか、または親が金持ちかの両極端の学生が集まることになる。ここでも外国人の受け入れが重要な財源となってくる。授業料も寮費も手続きの経費も何倍も多くとることができるからである。

それでもこの10年の間に外国語をあやつれ、経済の動きに敏感な若者たちの世代が着実に育ってきている。大学側の受け入れ態勢にもようやく道筋が定着しつつある。財源の確保ができさえすれば、少しずつ施設改善にも予算がまわっていくだろう。夏休みはまたかき入れ時で、寮の空いた期間、外国人用のサマースクールを開きゲストハウスとして利用している。

長く国家の庇護を受けて培われてきた教育・科学の分野に、その予算を削減されたとき何か起こるかをこの国の経験から学ぶべきである。廻りの状況にかかわりなく、今現在役に立たないことを長いスパンで研究しつづける、その安定性が学問の発達には不可欠である。そのためには国家による息の長いサポートが必要であるにもかかわらず、わが国が教育分野でとろうとしている道筋も、ロシアの場合とかわらない。国立大学独立法人化がたどる道はもっとスマートなものであることを願ってやまない。



17 ロシア人像

20年間ロシア人と付き合ってみてようやくロシア人像が浮かび上がってきてつつある。ロシアの古いことわざに次のようなものがある。

「100ルーブル持つよりは100人の友人を持って」

この国では伝統的に人間関係が大事にされる。これは、古代ロシアのドゥルジーナ（親衛団）の時代からの本質的なものであろう。ひとたび心を許して仲間になれば、プライベートな枠は全く取り払われる。この友人関係の助け合いが、いつの時代も互いの困難を救ってきたのである。

アジアの異民族との混血の歴史は我々東洋人と共通の民族性をも生み出している。彼らにも欧米人にはみられない「謙遜」の精神がある。例えば、自分のよいことは口に出して言わないことになっている。もし、「最高潮だよ」などと口ばしってしまったら、言った方も聞いた方も近くの木をトントンと音を出して叩くことになっている。悪い魂に嫉妬されて良いことが消えてしまうことのないようにである。

スピードと効率と目に見える実績が要求されるようになったこの10年の間にロシア人のロシア人らしさはどこかへ追い

やられ、忙しい現代人化が進んでいる。モスクワの場合は特に
そうである。まだロシア人氣質が生活のモードの中に残ってい
るペテルブルグでナージャが陽気にいってのける。

「ロシア人はひとがいいんだけど、ちょっとずるいところがあるから気をつけなさいよ！」

そのネガティブな面がこの社会の激動の中で前面に出されて、ロシア人の信用のなさ、不可解さのイメージを増長させている。しかし、資本主義化の浸透の進む数年後、ロシア人は日本人のよきパートナーになりうるだろう。医療面の質の向上の必要性、工場機械設備の老朽化の問題、時間と資源の効率利用のための技術支援など、今後の両者のパートナーシップのテーマに充分なりうる問題が山積している。

要は、本質的に自分の利益にならないことに関しては腰をあげないことを理解してつきあえばよいのである。

2001年7月12日

